

整形外科医

Orthopaedic surgeon

医師数 20,996人
(34歳以下の割合 14%)
男女比 95:5
勤務時間(週) 47時間
開業医の割合 37%
開業医の平均報酬額(年)
..... 2942万円

人の体を車に例えると、整形外科のカバー領域は、「走り」を担うボディやタイヤ部分。人間が動くことに必要な骨、関節、筋肉、神経などを「運動器」と総称するが、そのすべてを治療・メンテナンスするのが整形外科医だ。神経は、首から下すべてが守備範囲となる。

聖隷佐倉市民病院整形外科部長・手術部長の岸田俊二医師は、「間口の広い整形外科は、中に入ってからさらに働き方が選べるのが特徴だ」と語る。例えば岸田医師の専門とする股関節疾患では、多くは患者の脚を適切な角度を決めてひっぱり脱臼させることから手術が始まる。しかしこうしたダイナミックな手術以外にも、整形外科には繊細な手技が必要とされる手を専門に扱う手外科、脊椎疾患やスポーツ外傷・障害の専門家もいれば、手術がないため時間的に規則正しい勤務も可能なリハビリ専門家もいる。開業して大きな手術を行わないという選択肢も

あり、整形外科にはつきものの当直も開業すれば医師会の当番程度になる。ちなみに岸田医師の勤務状況は、週3回の手術日と週2回の外来診療で、当直もこなす。

「一般に整形外科の勤務医は、病院内で一番手術件数も多く、救急患者も引き受けていると自負しています。当院では手術専門の医師の当直は月1回程度に抑えられていますが、平均的には月2〜3回、多くて月4回程度」

機械好きの職人世界 やはり女性は少ない

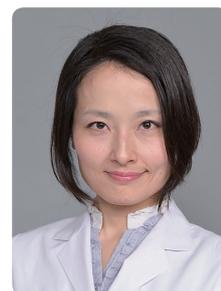
このように細分化が進んでいるため、専門を選び初期、後期研修と進んでも、それからさらに専門分野と働き方を選べる整形外科では女性が大いに進出してよさそうなのだ。しかし、医学部でよく「大工さん」に例えられる整形外科医には、今なお女性が少ないことも事実。東京大学医学部附属病院の山田恵

子医師は、そんな数少ない女性整形外科専門医のひとりだ。

「医師は本来職人的な部分が多い職種だと思えますが、整形外科は特にそうしたカラーが強いかもしれません。例えば、手首の骨折治療に埋め込むプレートとそのネジ。この話だけで語り合えるマニアックさがあります」

使用する器具や機械が実に豊富なため、自動車整備士にも通じる、機械を扱うことの多い日常に抵抗がない男性がどうしても多くなるようだ」と山田医師は語る。そして、研修医は先輩が執刀する手術で患者の足を持つことから始まる体育会系の世界でもある。

「『足持ち3年巻き8年』の言葉もあります。それでも今は手術機器の充実もあって、女性でもなんとかなる部分も多いです」
「職人的な整形外科の手術は痛みを取る、歩けるようにする目的が主で、人の生死にかかわる手術の割合は少ない。このた



山田恵子 Keiko Yamada

東京都出身。1999年東京大学医学部卒。東京大学大学院医療情報経済学客員研究員、ハーバード大学研究所客員研究員等を経て、東京大学医学部附属病院整形外科勤務。日本整形外科学会専門医、認定産業医。口コミチャレンジ！推進協議会委員

め患者から直接感謝される機会が多く、やりがいを感じる医師は多い。しかし高齢者では、すっきり治るわけではなく低空飛行の患者たちと長くお付き合いを続けていく内科的な側面もある。高齢化に伴い、骨折や関節疾患はますます増加が予想され、整形外科領域のニーズはさらに高まっていくと考えられるが、そうした中でどこに身を置くのかは、自分次第だ。

文/山口茜

手術畑からリハビリ一筋まで 働き方は自分次第

